

行き場を失った人々に ホスピスケアを

やまもと まさき

山本雅基 氏にきく

特定非営利活動法人

山谷・リバーサイド支援機構 理事長

きぼうのいえ 施設長

きぼうのいえ

〒111-0022

東京都台東区清川2-29-12

<http://www.kibounoie.info/>



山本雅基 著

四六判268頁／1680円(税込)

実業之日本社

都内北部に位置する南千住駅をおり、数分歩くと泪橋の交差点。ここが「山谷」の玄関口です。ドヤ（簡易宿泊所）が建ち並ぶこの街には、かつて、日本の高度経済成長を支える多くの日雇い労働者が暮らしていました。しかし今、不況や高齢化により、生活保護を受けてドヤに住む人々が増えています。格安ホテルに改装するドヤも増え、山谷の街を行くサラリーマンや外国人旅行者も珍しくなくなりました。

こうした変化の中にある山谷の真ん中に、山本雅基さんが二〇〇二年十月、ホスピス「きぼうのいえ」を設立しました。「東京のドヤ街・山谷でホスピス始めました。」は、きぼうのいえの設立から今日までの歩み、看取ってきた人々の思い出、「きぼうのいえをやめたくなった夜」のことなども包み隠さず記された感動的な一冊です。

神と人に仕えるカトリック神父になりました。二十代後半で上智大学神学部に入った山本さん。しかし在学中に出会いがあり、小児ガンなどの難病を抱えた子どもたちとその家族のための宿泊施設「ファミリーハウス」を作る運動に関わるようになります。一〇年間の働きを経て病に倒れ、この運

動から退きます。天に召された子どもたちを思い自宅で悶々と暮らす日々、「自分は何を本当にやりたいのか」と問う中で〇一年、「そうだ、身寄りがなく行き場を失った人々、しかも人生の残りの日々に厳しい期限がついた人々のためのホスピスを作ろう！」との新たな願いを与えられました。

以来、デーケン神父のもとでホスピスを学び、在宅ホスピスケアの第一人者である川越厚医師をはじめ医療関係者に教えを乞い、介護保険制度を学び、寄付を募り、銀行から一億円を超える借金をして土地を取得し鉄筋四階建ての建物を建て……。こうした一歩一歩を看護師である妻・山本美恵さんと共に歩み、ついに「きぼうのいえ」は開設されました。この、人の目には「無謀」に映る計画が実現されていく過程を読むとき、「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」（フィリピ2・13、口語訳）の聖句を思い出すのではないのでしょうか。

開設から五年半で、きぼうのいえを通過した人は一〇〇人、亡くなった方は六一人。社長、芸者、日雇い労働者、料理人など、



「きぼうのいえ」のひとこま。



「きぼうのいえ」は後援会費（個人
会員年会費1口3000円）によって支
えられています。ご協力ください。

郵便振替番号 00130-3-664844
山谷・すみだリバーサイド支援機構
問い合わせ 電話03-3875-7523



中村智志 著
四六判316頁／1680円（税込）
新潮社

『段ボールハウスで見る夢』で知られるドキュメンタリー作家であり、朝日新聞社記者である著者が「きぼうのいえ」を書いた1冊。この「いえ」に辿りついた方々の人生が丹念な取材により描かれている。

さまざまな過去を持つ方がいましたが、共通するのは「行き場を失った人々」だったことです。山本さんは言います。

「一般に『ホスピス』と言うと病院付属の施設型ホスピスを想像しますが、きぼうのいえは何よりも『いえ』です。二人分の個室があり、一人一人の生活があります。そして看護師や担当医の往診によって在宅ホスピスケアを受けながら、最期まで家族のように過ごすことができます。

最初ホームレスの方々のホスピスを作ろうと思っていたのですが、準備段階で、ある福祉事務所の職員がアドヴァイスをくれました。『ぎりぎりの年金で、路地裏の古いアパートに一人で暮らしているお年寄りがたくさんおられます。訪ねる人もなく、テレビを友に孤独を奥歯に噛みしめるようにして生きている、こういう方の家を作ってくれませんか』。この言葉にグツときて、現在のような、広い意味での身寄りのない庶民のためのホスピスを、と思ったんです」

●
苦しい人生を歩んできた方々が多く、入居当初はスタッフにも他の入居者にも心を開かず、罵詈雑言しか語らない人もいます。しかしそのような人が、この「いえ」で変

わっていくことがあるそうです。

「愛されているという事実を知ることにより、自分が逆に愛し返すことができるようになる。この愛のやりとりこそ、人間が命を与えられた最大の理由なんだ、ということを知らされてきました。教会で繰り返し教えられたはずのことですが、きぼうのいえを始めてようやくそれを理解しました。僕たちは特にキリスト教を前面に出すこととはしないですが、この愛の交わりの中で、手足をさすり声をかけながら、一人一人を天に送りたいと願っています。もうこの世で会えなくなることが寂しくて涙をもってわかれるんだけど、同時に、『この世での修行お疲れさまでした』とねぎらって、み国に行かれることに対して『おめでとうございませう』と祝福するという、そういう看取りを丁寧（ていねい）に続けていきたいです」

山本さんの本の中にも、さまざまな看取りの場面が記されています。たとえば美恵さんがかけたこんな言葉。——石田さん、精一杯がんばって生きたね。もう充分だよ。すばらしいがんばりだった。石田さんのことと忘れないからね。逝きなくなったら力をぬいて楽にしていよ——。きぼうのいえが目ざすものがよく伝わってきます。 Ω